

## ベルナノスのふたりの聖人：フヌイーユの司祭とア ンブリクールの司祭

野村，知佐子

<https://doi.org/10.15017/10011>

---

出版情報：Stella. 18, pp.171-181, 1999-06-10. 九州大学フランス語フランス文学研究会  
バージョン：  
権利関係：

# ベルナノスのふたりの聖人

—— フヌイーユの司祭とアンブリクールの司祭 ——

野 村 知 佐 子

ベルナノスの代表作『田舎司祭の日記』（1936年）にその構想を与えたものとしてつぎの2つのもを挙げるができる。ひとつは彼が幼年時代を過ごしたフレッソンでの思い出である。とりわけその土地の城主の姿はトルシーの司祭や伯爵の姿の原型になったとされる。もうひとつは約10年にわたって書きつがれた『ウィーヌ氏』（1943年）のなかに登場する名もないひとりの司祭の姿である。この作中人物にひかれたベルナノスは、こんどは彼を中心とした物語を描いてみたいという思いに駆られたのである。こうして、まるで「自分の作品ではないかのように」ベルナノスの愛した聖人の物語は、彼の作品のなかでもっとも悪魔的な『ウィーヌ氏』から生まれたといえる<sup>1)</sup>。本稿では、『ウィーヌ氏』に登場するフヌイーユの司祭をとりあげ、『田舎司祭の日記』のアンブリクールの司祭との相違点を比較検討することによって、前者のなかに後者の片鱗を見いだしてみたい<sup>2)</sup>。

\*

この2人の司祭が幼年時代の聖寵を分けもつ人物のなかに名を連ねていることは断るまでもないが、それにくわえて彼らはまるで同一人物であるかのような著しい類似性をもつ。貧しい生まれで早くに両親をなくし、ともに酒屋を営む伯母のもとに引き取られたという生い立ち、神学校の教育が型にはめることのできなかった彼らの性格などがそうである。また、アンブリクールの司祭が神学校で最も親しかった友人からその還俗を知らせる手紙を受けとる一方、フヌイーユの司祭も彼と親しかった友人たちすべてがすでに聖職を離れていることを語る時、教区における彼らの孤独はなおいっそう浮き彫りにされよう。

さらには、つぎに挙げる彼らの言葉は同一の内容であると言っても過言ではあるまい——

「善と悪のなかで私たちを互いに結びつけている連帯の明瞭な観念が、もし神の手によって私たちに与えられるとするなら、実際私たちはもう生きてはいけないう」[J, 1159]

「もし神が目に見えない世界に向かって私たちの感覚を開いて下さったら、私たちのうちの誰がその場で死なずにいられるでしょう？」[M, 1488]

両者の言葉は、偶然と目される人々の営み全てに必然性の刻印が見いだされるとしたら、それは人々を死に至らしめるほどの恐ろしさを有していると述べるものである。これらの言葉は一方は子供をなくして神を憎み続ける伯爵夫人にたいし、もう一方は牛飼いの少年の葬儀の際に群衆にたいし向けられたものである。では彼らはそのときいかなる状態にあり、またいかなる作用を相手にたいて及ぼしたであろうか。

アンブリクールの司祭は伯爵夫人との対話の最中、自身の姿を鏡のなかに見つける——

たしかに夫人は私を帰したがっていたらしい。しかし私の情けない顔（鏡のなかにそれが見えたが、芝生の緑の反射でそれはことさらに鉛色で滑稽だった）に眼をやるたびに、顎を心持ち動かし、私を説き伏せ言い負かす力と意志を再び見いだすように思われた。[J, 1148]

司祭の真剣さにもかかわらずその外見は貧弱で滑稽である。この対照は彼の不器用さ、無経験さとあいまって彼をアンブリクールの教区の人々の嘲弄的とするものである。一方人々の前で自身の教区がすでに死んでいることを告げたフヌイーユの司祭は教区の人々に大きな不安を与えるも、その直後に墓穴のふちのところで足を滑らせ転倒し、彼らの嘲笑的となる——

そして今その彼〔＝フヌイーユの司祭〕が目の前にいた。蒼白く照りつける日射しを受け、粘土の無味乾燥な臭いにまじって香のかおりのかすかに漂うなかを、祭服にべっとり泥をつけて立っている。そのかたわらにミサごたえの少年が、鼻をすすりながら大きな十字架を斜めにささげている。[M, 1495]

ここでは悪魔の陽を連想させるかのようなこの「蒼白く照りつける日差し」の下、相対する属性をもつものの混在が、ことさらに強調されているように思われる。すなわち「粘土」という田舎の生活臭と「香」という祭儀につきものの非日常的な芳香の、清浄であるべき「祭服」とそれを汚す「泥」<sup>3)</sup>の、また、厳肅な雰囲気との似つかわしい「大きな十字架」とそれを下げた少年が「鼻をすする」という滑稽さの混在である。このように2人の司祭はともに真剣でありながら滑稽な外見をもち、ほぼ内容を同じくする言葉を発するのであるが、この事実に対して、彼らの相手に及ぼす作用は正反対である。

アンブリケールの司祭の外見の滑稽さは伯爵夫人の誇りを傷つけ挑発し、彼女に誰にも語らなかつた秘密を語らせるのである。彼は敬虔で温和な外観の伯爵夫人が、息子をなくした悲しみと家庭の不和のために神に心を閉ざし絶望的な日々を送っていることを知る。そして伯爵夫人は前述の、見えない善悪の芽がいかにして実を結ぶかを明白にすることは不可能であるという司祭のことばに色を失うのである。伯爵夫人の驚愕は、彼女が自身の罪と真に対峙した証拠であるといえよう。これに対してフヌイーユの司祭が少年の葬儀の際、押さえがたい衝動に駆られて先に引用した言葉を村人たちの前で口にしたとき、だれよりも強い反応を示したのは村長のアルセーヌであった。性的強迫観念に苦しむ彼は、自身がすでに悪の深淵のなかにいることを感じとっている。彼にとって司祭の言葉は村全体を彼の属している深淵にともに沈めることを意味するものであった。自分と同様の罪と汚れが村人たちの間にも遍く存在するのを感じた彼は激しい共感と解放の歓びにとらえられる。彼は自身の罪と対峙せず、群衆のなかにその罪を埋もれさせようとするのである。一方アルセーヌの解放の歓びと呼応するかのように、フヌイーユの司祭の演説を耳にした群衆の、司祭にたいする「迷信的な恐れ」[M, 1495]は最高潮にたつする。理解不可能な恐れを前にしたときもはや笑いによってしかその身を守る術がないとすれば、人々の視線はいやが上にも司祭の滑稽さに注がれ、その嘲笑はなおいっそう苛烈なものとならざるをえない。彼らは笑いによって司祭の発した恐ろしい言葉を拒む。このときすべての真剣さと滑稽さとの区別が取りはらわれる。この状況に対しウィーヌ氏は「今すぐにも喜劇的であると同時に悲劇的であるような嘆かわしいできごとがもちあがるかもしれませんよ」[M, 1492]と警告を発するが、この警告を実現するかのように村人によるネレイス夫人のリンチ事

件がおきてしまう。この事件は白昼堂々おこなわれ、その一部始終がそこにいあわせた誰の口からも語られるほどあからさまな外観を呈するのにもかかわらず、村人たちの集団ヒステリーという性格上、主犯の人間を特定することも不可能で、ひとりの人間の生死にかかわる事件でありながら誰ひとりそれによって裁かれることはないという、まさに村全体を罪のなかに溶け込ませたかのような性格をもつ。

このように意味のうえではほぼ類似した2人の司祭の言葉は、一方は単独者としての伯爵夫人に、他方は匿名性に包まれた群衆にたいして働きかけまったく正反対の効果を生みだす。前者が相手の罪を自覚させ神と対峙させるのにたいし、後者は罪のなかに人々を溶かしこみ、さらなる惨劇を生むのである。それではフヌイーユの司祭の聖性を無効にするものとは何であろうか。彼とウィーヌ氏との対話のなかにその原因を探りたい。

\*

ベルナノスの作品には死んだ少年というイメージを中心に展開するものが数多いが、『田舎司祭の日記』や『ウィーヌ氏』もまたしかりである。一方は赤ん坊のころ命を失った伯爵夫人の息子を、他方は殺害された牛飼いの少年を中心に物語は展開する。伯爵夫人にとって息子の蘇りが神との和解であり、フヌイーユの教区にとって牛飼いの少年の死が教区をその悪の極みに達させた出来事であるとすれば、彼らの姿がキリストのそれと重なることはいうまでもなからう<sup>4)</sup>。そして前者がその復活を表しているとするれば、後者はその死そのものを表しているといえよう。キリストが復活するためには何よりもまず2人の子供の死に直接かわりをもつ人物がその死と向かいあわなければならない。

アンブリクールの司祭は、伯爵夫人の、教会へも欠かさず通い敬虔なキリスト教徒としての勤めは残らず果たしているという言葉にたいし、強い衝撃を受ける。人類の反抗とは悪魔すらその秘密をつかんでいない神秘であるとするとき、神を呪うという行為は神との対峙にほかならない。伯爵夫人が息子の死を見つめ直し神への憎悪を自覚することが神との和解へとつながるのであれば、牛飼いの少年を殺害した人物もまた、自身の罪と真剣に向かい合ふことが必要ではなくである。かくして少年を殺害したウィーヌ氏はフヌイーユの司祭を訪問す

る。彼らの対話は前任の司祭についてという全く当たり障りのない話題によって始まる。これはアンブリクールの司祭が伯爵夫人訪問のために考えていた口実を失い、いきなり本論に入らなくてはならなくなるのとは対照的であり、これにつづく彼らの対話の方向性を決定するかのようである。つぎの引用はウィーヌ氏と司祭の対話の一部である――

「先生」とフヌイーユの司祭は言いはじめたが、だいぶもったいぶった口調だった。「なるほど私はまだ人間について、人間の不幸について沢山のことを学ばなければなりません」。「私はあなたのためにしゃべったわけではありませんよ」とウィーヌ氏は、ほとんど優しいともいえる口調で言った「そうじゃないのですよ、あなた」。

彼の優美とはいえない目鼻立ちに突然まじめな、それでいてどこかなれなれしいところのある哀れみの表情が浮かんだ。口もとにはあいかかわらず微笑が漂っていた。

[M, 1464]

司祭の「もったいぶった口調」は教区でインテリと見なされているウィーヌ氏を前にした戸惑いの現れであろう。ウィーヌ氏と対等であろうとする司祭の試みは彼から本来の洞察力を奪っているといえようし、そんな司祭の心を見透かしたウィーヌ氏は「どこかなれなれしいところのある哀れみの表情」で彼を見つめる。ここには自身の罪を告白しにきた人間のもつ緊迫感が全く欠けているといえよう。ウィリアム・ブッシュは、ウィーヌ氏のフヌイーユの司祭へのこの訪問は彼の魂にとって「最後のチャンス」[M, 1470]であったことを強調している。しかしながらウィーヌ氏の秘密を見抜くことのできなかつた司祭の無能力もさることながら、自らの傲慢さのためにウィーヌ氏はこの最後のチャンスを取り逃がしてしまう、と彼はいう。またブッシュは2人の対話のなかに見られる「無邪気さは中年に特有の病気」[M, 1463]であるというウィーヌ氏の言葉が明らかに少年時代の彼を誘惑した歴史の教師を連想させることも指摘している<sup>5)</sup>。この指摘に沿ってウィーヌ氏の言葉を再読するとき、そこには非常に微妙なニュアンスが感じられる。「あなたの孤独が私を引きつけるのです」[M, 1465]という言葉は、だからこそ司祭を自身の秘密の打ち明け手として選んだという意味に取れるが、それに続く彼の言葉は若い司祭を孤独のただなかへほうり出した教会制度そのものへの批判へと変わる。また、牛飼いの少年の死についてのウィーヌ氏の言及は、司祭の口から「人々の心をこんなふ

うに惑わしているのは新聞の責任です」[M, 1465] という一般論を引きださせてしまうほど著しく個人的な色調を欠いている。伯爵夫人の秘密であった息子の死はそのまま神への憎悪であり、その憎悪を捨てたとき彼女の命も絶えたことを思えば、彼女の秘密とその命との深い結びつきをなおさらいっそう感じさせずにはおかない。それは伯爵夫人の個性そのものであり、命そのものであるかのようなのである。しかるにウィーヌ氏は自身の秘密のありかを匂わせながらもそれを即座に一般論のなかにもみ消してしまうのである。司祭が教区の人々を相手に説教をするとき、彼は互いに責任を押しつけることのできる匿名性を相手にしているということは先に述べたが、ここでもまた、一対一で対峙しているにもかかわらず、ウィーヌ氏の言葉に見られるこの驚くべき無個性さは、群衆と同等の匿名性を感じさせるものであるといえよう。少年を殺害したのが彼であるとき、フヌイーユの教区の失墜は明らかに彼の責任である。それにもかかわらず少年の葬儀の際、司祭の演説がさらなる惨劇を引き起こすことを予感した彼は司祭に演説を思いとどまらせようとする<sup>6)</sup>。これはウィーヌ氏の善意の現れというよりむしろ真剣さの欠如を意味すると思われる。彼には悪を貫く個性さえも欠けている。その様は自身の秘密を弄んでいるかのようなでもあり、それに退屈しきっているかのようなでもある。以上のように、フヌイーユの司祭の聖性を無効にしたものはほかならぬウィーヌ氏の存在であるということができよう。彼の真剣さを欠いた言動は司祭の洞察力を鈍らせる。司祭は罪人を目の前にしながらそれと対峙することすらできない。つまり司祭は死んだ少年のなかにキリストの復活の可能性を見ることさえできないのである。アンブリクールの司祭がキリストの復活という試みに成功し、ドニサン神父が失敗するのに対し、フヌイーユの司祭はその試みに向かい合うチャンスすら奪われているといえよう。それではウィーヌ氏の介入とは聖性を無効にする介入であるとしたとき、この介入を受けたフヌイーユの司祭と受けなかったアンブリクールの司祭とのあいだにはいかなる相違点が認められるであろうか。

\*

ベルナノスの登場人物たちは2つの種類に分類される。すなわち子供時代の聖寵を担う人物と凡庸な人物である。彼らを区別するものとしてここでは2つ

の方法を挙げたい。そのひとつは邂逅の成否である。ベルナノスの作品世界では登場人物たちはしばしば見交わす瞳のなかに互いの分身を見いだす。例えば『悪魔の陽の下に』の懐疑主義者サン・マランはランブルの聖者を訪問するが、彼らの邂逅は聖者の死によって阻まれる。これは両者のあいだにのりこえがたい差異が存在することを意味するものである。つぎに、2種類の人物たちの一方が実践を重んじるのにたいし、他方は空論を弄ぶに終始することを挙げたい。『歓び』のなかでシャンタルは狂気の祖母に必死に働きかけ、老女に分析医が与えることのできなかつた心の平安を与える一方、分析医は老女にたいしまったく無力である<sup>7)</sup>。ここには聖寵を担う者と科学中心主義者を分かち実践と論理という対立が伺える。そしてほとんどの医師が凡庸な者として描かれているなかで、例外的ともいえるのが『田舎司祭の日記』に登場するデルバンドとラヴィーユである。「かつて、どの本においてもこれほど多くの英雄と子供をちりばめた作品はない」<sup>8)</sup>とベルナノス自身語っているように、この2人の医師もまた知識人でありながらその生がアンブリクールの司祭と触れ合う部分をもつ英雄的な存在である。前者は神を見失ったために自死を選び、後者はアンブリクールの司祭に胃癌の宣告を下すが、自らもまた死病に冒されている。彼らは死という連帯を通じて司祭と対峙し、司祭は彼らのなかに自分自身の似姿を見いだしている。2人の医師が等しく英雄であるとすれば、聖寵の担い手である司祭と彼らのあいだに対話が成立することはあまりにも当然であるといえよう。しかるに『ウィーヌ氏』において司祭と医者の間に対話が成立するとき、それはいかなる意味をもつものであろうか。

村長アルセーヌの自殺を仄めかす失踪はすなわち教区の死を象徴するものであるが、その狂気と死を巡って、フヌイーユの司祭とマレピーヌ医者はともに言葉を交わす。村長の秘密が認められた手記に医者の科学的な解説が施されるのを聞くと、司祭は純潔への郷愁という神秘が踏みにじられるのを感じて激しく抗議する。しかし司祭のなかにヒステリックなものしか見ることのできないマレピーヌを前に彼は自身を愚かしいもののように感じて口を噤む――

自分の声の調子に脅えたかのように彼 [= 司祭] は口を噤み、白目の部分まで赤くなった。瞬く間に彼の顔は、それを愚かしいものに見せるあの苦痛と諦めの表情を取り戻した。「あまり興奮しないようにしましょう」と医師は言った。「このすこぶる興味深い議論を再開する時間ならいつでもある […]」[M, 1526]



フヌイーユの司祭の言葉は医師を前に空しく響くだけである。魂の神秘を感じている人物のこれほどの無力さはベルナノスの作品群において他に例を見ない。この点において彼らの対話は特筆に値すると言わねばなるまい。医師との対置がいかにかに司祭の力を擦り減らしているかは明白であろう。人間の魂を相手取る司祭と科学のみを信奉する医師は画然と区別されてきた人物同士である。しかし彼らが属するのはウィーン氏の支配する空間であって、そこでは一切の区別が消失する場である。区別されることによって守られてきた司祭の力は価値の混交によってその力を失う。ちなみにフヌイーユの司祭は名をもたない。ベルナノスはしばしば物語の展開にほとんど影響力をもたない人物にたいして固有名詞を与える。しかし例えばネレイス夫人の死の引金となった事件においても、それについて証言する村人たちにほぼ逐一名前が与えられているのにたいし、主要登場人物の彼が名前をもたぬことは少なからず奇妙な印象を与える。とりわけ司祭と医者がアルセーヌについて議論を戦わす場面では、マレピーヌという医師の固有名詞も同様に用いられない。彼らが共にフヌイーユの医師とフヌイーユの司祭となると、2人の存在は実質を失いあたかも互いにお互いあう単なる概念に墮したかのようである。じじつ村長アルセーヌを救おうという両者の試みはどちらも失敗に終わる。司祭は彼に告解を促すが拒絶される。司祭の手に委ねられてこそ浄化の作用を発揮したであろう村長の秘密は医師の手にわたる。医師は村長の残した手記に科学的な解説を施すことしかできない。そして、医者にたいし司祭がいかにかに抗議を繰り返そうと、アルセーヌにたいし無力であるという点において司祭と医師とは同一なのである。行為へとつながらぬ限り観念は何も生み出さぬことを思えば、ここではシャンタルと分析医の間にあった実践と論理という質的差異も消失しているといえよう。アンブリクールの司祭の聖性が科学を司る者のなかにまで浸透したかのようと思われるのにたいし、フヌイーユの司祭のもつ聖性は医者合理主義によって汚されているかのようである。ウィーン氏の介入によって司祭の有する聖性は剥奪され、凡庸な医師の信奉する科学中心主義と同じ位置まで引き下げられるのである。

さて、フヌイーユの司祭の力がウィーン氏の介入によって無に帰したのとは対照的に、アンブリクールの司祭がその聖性を成就するためにいかに注意深く守られているかを伯爵夫人の死のエピソードのなかに見ることができよう。ア

ンブリクールの司祭は教区の人々にとって不器用で経験の乏しい哀れな司祭でしかない。彼の真の姿はわずかの例外的な人々にしか見抜くことができないが、彼らはすべて司祭を聖人としての成熟へと向かわせるのである。例えば沈黙がその成熟にとっての必要条件であるとき、伯爵夫人とその娘はいやおうなく彼を沈黙のなかへ追いたてる。すなわち母親は彼によって神との和解を勝ち取るなり心臓発作でその生涯を終え、母親の死にかんして真実を知るシャンタルは偽証によって彼を窮地に追いこむのである。彼にたいする世間からの誤解は完璧なものとなるが、フヌイーユの司祭が群衆を前に自身の力を空費し、さらなる惨劇を引き起こしたことを思えばアンブリクールの司祭にとってこれは恩恵的ともいえるできごとなのではないか。またつぎに挙げる『聖ドミニック』からの引用は、聖人とは自身を不利に追い込むことがらによってこそ、その聖性を証しづけられることを示しているように思われる――

偉大な人間の運命は一般的な法則に従うものである。彼らの機会にはその成熟のときがあり、凋落があり、衰退がある。マレンゴではすべてがうまくいった。ワーテルローでは何もかもだめであった。だが聖人の生には別のリズムがある。その始まりは緩慢であり、ときには無意味でさえある。矛盾は外部からやってくるのだが、それはあたかも内側から生じているかのように見える。そして彼が神秘的な均衡を見いだしたとき、聖人の生は地上からもぎ取られ、上昇するのだ。<sup>9)</sup>

仮に英雄がその莫大なエネルギーによってその偉業を成し遂げ栄光をその手にするならそのたびごとに彼のエネルギーは昇華されるといえよう。これに対して聖人の生涯には常にその昇華を阻み続ける力の介入があるといっても過言ではないのではなからうか。伯爵夫人がアンブリクールの司祭によって神との和解を手にした後も生きながらえたとすれば、彼の行為は伯爵夫人の存在によって地上の栄光となろう。とすれば彼の行為は英雄のそれと何ら変わるところをもたぬといえるのではないか。聖人としての彼にとっては伯爵夫人の死も彼女の娘が彼の呵責ない敵となることも必然であったように思われる。彼のエネルギーは彼が「神秘的な均衡」を、つまりは「全ては恩寵だ」[J, 1259] という最期の言葉を見いだすまで神の名の下に慎重に保持されなければならなかったのではないか。一見したところ破綻の連続であるかのように見えた彼の生は沈黙のうちでの成就であり、ついには高みへと一気に上昇するかのようである。

以上のようにフヌイーユの司祭は、価値を互いに相殺しあうあまりにも多くの要素の混在にその力の発現を阻まれているといえよう。まさしくウィーヌ的空間の無秩序さに彼はその聖性を汚されているかのである。一方アンブリクールの司祭においては一見したところ彼を絶望のなかに追いこむできごとさえも彼を聖人として成熟させるために作用しているといえよう。

\*

アンブリクールの司祭の教区でのたったひとつの業績の喪失が彼の聖性を守るために機能したとすれば、フヌイーユの司祭の聖性は最初から汚され、いかなる機能も発揮しえないといっても過言ではなかろう。2人の司祭はほとんど同一人物であるかのような類似した性質をもちながら、一方がその聖性を成就させるのにたいし他方はその試みの中絶を余儀なくさせられる。フヌイーユの司祭の聖性の成就を妨げたものがウィーヌ氏という悪魔的な人物の介入であるとするれば、逆説的にこの哀れな司祭は聖性への莫大な可能性を内包しているように思われる。とすれば、作家であるベルナノスがウィーヌ氏によって中絶させられたフヌイーユの司祭の聖性の成就をアンブリクールの司祭のなかに見いだしたいと感じたとしても不思議はないのではなかろうか。あたかもネガがポジを構成するがごとく、ベルナノスの作品中もっとも悪魔的な作品のなかから奇跡のようにもっとも神聖な物語は浮かび上がったということができよう。

註

- 1) Voir Albert BÉGUIN, *Bernanos*, Paris : Éd. du Seuil, coll. «Écrivains de toujours», 1982, p.173.
- 2) 『田舎司祭の日記』および『ウィーヌ氏』のテキストとしてはブレイアッド版『小説集』(Georges BERNANOS, *Œuvres romanesques*, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1988) を使用し、引用にあたってはそれぞれ J, M の略号を付してページ数を [ ] 内に記す。訳出にあたっては、渡辺一民による邦訳(『ベルナノス著作集』第2巻, 春秋社, 1976年)と渡辺義愛による邦訳(同, 第3巻)を参照した。
- 3) ヴァン・サンタンはベルナノスの悪の最終的な形態は「泥の湖」というイマージュ

で表されるとし、この状態はまた『創世記』において語られる人類の創造以前の姿でもあることを指摘している (voir J.-P. VAN SANTEN, *L'Essence du mal dans l'œuvre de Bernanos*, Leiden : Presse universitaire de Leyde, p. 116)。またクロード・ガルダは、泥とは悪のシンボルであり罪人にとっての牢獄であるが、この牢獄は新たな道へと変わる可能性を秘めており、かりに罪人と聖人とのあいだに差異があるとすれば、それはこの変化を成し遂げられるか否かであるという (voir Claude GARDA, «La nuit dans *Le journal d'un curé de campagne*», in *Études bernanosiennes* 18, Paris : Lettres Modernes Minard, 1986, pp. 68-70)。

- 4) 人類と神との一体化は、神の完全性に疵がつくことによって行われるが、それはキリストの磔によって象徴される。キリストを磔にすることによって人類はその悪の極みに達するとジョルジュ・バタイユはいう (清水徹・出口裕弘編『バタイユの世界』〔新版〕, 青土社, 1991年, 516頁)。とすればキリストの復活は人類がその悪の極みに達することなしにはありえないが、『ウィーヌ氏』においてはこの悪の極みの一点で時間が停止しているといえよう。
- 5) Voir William BUSH, *L'angoisse du mystère*, Paris : Lettres Modernes Minard, 1966, pp. 118-119.
- 6) 『ウィーヌ氏』は数多くのヴァリエーションをもつが、ネレイス夫人のリンチ事件が起きる直前のエピソードのうち、ベルナノスが削除したものにつぎのようなものがある——。惨劇を予感したウィーヌ氏はそれを子供たちの目に触れさせないために小学校の教師にたいし彼らをその場から離れさせるよう忠告する。忠告に従った教師は年長の生徒を使って子供たちを少し離れた場所に集合させ、自分が合図したらいつでも出発できるようにと命令を与えるのである (voir BUSH, *op. cit.*, pp. 135-136)。自身の引き起こした惨劇から子供たちを遠ざけるウィーヌ氏のこの配慮も、真剣さと滑稽さの入り混じった行為のひとつであるように思われる。
- 7) 祖母を長年の不安から解放した後、フヌイーユの司祭のようにシャンタルもまた、医師ラ・ペルーズと対話を交わす。しかし最初はシャンタルを医学的に分析しやり込めようとした医者も、やがてシャンタルを前に自身の不幸と対峙することとなる (voir BERNANOS, *Œuvres romanesques*, *op. cit.*, pp. 663-674)。フヌイーユの司祭とは対照的に、聖龍の担い手であるシャンタルの、凡庸な医師にたいする影響力は絶大である。
- 8) Cité par BÉGUIN, *Bernanos*, *op. cit.*, p. 176.
- 9) BERNANOS, «Saint Dominique», in *Essais et écrits de combat*, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1971, p. 13.